

# 明治二十九年の虚子

## ——『五百句』評釈と研究——

小澤 實

大根の花紫野大徳寺

明治二十九年

初出は、『自選類題虚子句集』「大根花」の題の下に左のごとく見える。

大根の花紫もうつろひぬ 二八

大根の花紫野大徳寺 二九

对居して書に倦みがちや花大根 三二

島原

道中は明日の廓や花大根 三五

下に、記されているのは、成立年、明治の年である。

なお、この句は、明治二十九年二月二十日付森鷗外宛虚子書簡（定本高浜虚子全集番号一九一）に

人のすむ明石の城や春の月

礎や葎など茂り雉の声

大根の花紫野大徳寺

叱正伏乞

という形で見える。この書簡の「芳書拝受仕候 愚兄病氣漸次快方に赴き候につき乍憚御放念被下度 めさまし草第一巻再板の運びに立至り候趣いづれ来月上旬には帰京其節拝顔を得んと楽み罷在候」という部分から、長兄病気のため松山に帰郷した際の書簡であることがわかる。ゆえに、帰郷途上か、回想の句であろう。この句の成立は、明治二十九年二月二十日以前ということになる。

\*

この句の季語は、「大根の花」。晩春、四枚の花弁が十文字についている、菜の花に似たかたちの花を咲かせる。ただ、色は、紫を帯びた白である。『花花草草』（寛永十三）、『毛吹草』（正保二）などが、「菜、大根の花」として収載。「大根の花」という形で見えるのは、『糸屑』（元禄七）、『をだまき網目』（元禄十）以降である。近世、俳諧の題としてとりあげられたものである。

近年、諸葛菜、またの名をむらさき大根のことを花大根と呼ぶようになっていた。この花は、鮮やかな紫色が

賞せられている。これとは同類であるが、あくまでも別もの。

大根の花の雪白子は育つ

大野 林火

という句があるように、大根の花はむしろ白。紫は、ごく淡い。菜の花にくらべて、ひっそりともさびしげな花である。

また、紫野は、平安京の北方一帯、愛宕郡の野。当初は、七野と呼ばれる野のほかのいくつかも含んでいたと思われるが、現在では大徳寺一帯をいう。『類聚国史』延暦十四年（七九五）十月一日に、桓武天皇が、「遊獵於紫野」とみえるように、由緒ある地名である。また歌枕として、『能因歌枕』などにあげられている。『枕草子』「第百六十二段」には次のように見える。引用は、「新潮日本古典集成」による。

野は、

嵯峨野さかのの、さらなり。

印南野いなみの。

交野かたの。

狛野こまの。

飛火野とよひの。

標し野しめの。

春日野。かすがの

草深野こそ、すずろにをかしけれ。などで、さつけむ。

宮城野。みやぎの

粟津野。あはづの

小野。その

紫野。むらさきの

萩谷朴氏の校注によれば、「洛西嵯峨野に始まって洛北紫野に終る、地名類想段の典型的な求心回帰性」を示す段とのことである。ここで「紫野」は、言うもさらなる「嵯峨野」から出発した連想の最後の歌枕の「野」になっている。歌枕の中でも、かなり重要なものと言える。

『俳諧類船集』は、「紫野」から連想される語として、十六語を掲げるが、そのうち、植物は、一もと菊、茜草、あふひ草、藤の花、我宿の松であった。それぞれ元となった歌をあげると次のようになる。引用は『松葉名所和歌集 本文及び索引』による。

名にしおへは花匂ふなり紫野一本菊にをける初霜

あかねさす紫野ゆき標野ゆき野守はみすや君か袖ふる

諸人のかさしてかへる葵草紫野にてみとりなる哉

我宿の松にひさしき藤花紫野には咲もしぬらん

『方与集』

額田王『万葉集』

兼昌『堀後』

忠見『忠見集』

大根の花は、これら歌枕と結びついた植物とは異なる。まるで無頓着のようだ。ここに俳句としての親しみがあった。これについては、後述する。

大徳寺は、船岡山の北にある臨済宗大徳寺派の大本山。正和四年（一二三二）、宗峰妙超（大燈国師）が、赤松則村の帰依をうけ、雲林院の故地に建立した。宗峰は、花園天皇・後醍醐天皇の帰依をうけ、大燈国師の号を賜り、寺も勅願寺となる。鎌倉末期から南北朝初期に隆盛を誇り、五山の第一とされた。しかし、足利尊氏が宗峰門派と対立関係にあった夢窓疎石門派に帰依したため、急速に衰退することになった。室町幕府の定めた五山制度の下では、五山の下下の寺格である十刹の九位に落されている。そこで、永享三年（一四三二）、大徳寺は十刹の寺格を放棄し林下とよばれる在野の禅寺となる。これは、幕府と密着した五山十刹の世俗化した禅風に対する、強い批判に基くもので、以降、野にあって独得の禅風を保持していくことになる。この禅風こそ大根の花にふさわしいものであった。

応仁の乱の兵火にかかった大徳寺再興のなかで、大きな役割を果たしたのが、四十七代住持、一休宗純、連歌師宗長であった。また、村田珠光の一休参禅を契機に、茶人も相次いで参禅している。千利休一族が山門に上層を築造し、自らの像を安置、秀吉の怒りを買ったのもこの寺であった。文事との関わりの濃き寺である。

なお、現代の住所も「北区紫野大徳寺町」である。「紫野大徳寺」と続けることは、ごく自然であった。以上「京都府の地名」大徳寺の項を参照した。

虚子は、京都の句を数多く残している。それは、中田余瓶氏によって編集され、『虚子京遊句録』として、昭和二十三年、富書房より刊行された。大徳寺の句は、本句と

が記されている。

\*

『虚子五百句鑑賞 明治の部』によれば、大意は、「大根の花が紫に咲いて紫野大徳寺であることよ」とある。紫が、「紫野」という地名の一部であると同時に、大根の花を受けている。「紫」は掛詞である。掛詞とは、申すまでもなく、「和歌において発達した修辞法の一つ。音節構造の単純な日本語において、二つの語が共通の音をもつ場合が多いことを利用し、表面上一つの表現でありながらうちに二様の概念または表象を含ませて、意義含蓄を豊かにし、複雑微妙な効果を求める手法」『和歌大辞典』である。これは、和歌において発達したとあるが、俳句においてははどうだったのだろうか。現代の俳句では、ほとんど用いられていない。

俳諧の祖と呼ばれる山崎宗鑑に次のような句がある。

うづきなくゝてねぶほととぎすとに鳴や郭公

うづきは卯月と疼きが掛けられ、ねぶとは音太と籬の一種である根太とが掛けられている。俳諧のことばあそびとして掛詞が用いられているのである。

そのあそびを質的に高めた芭蕉も少なからず用いている。ことに、『おくのほそ道』の地名においては多用されている。

あらたふと青葉若葉の日の光

雲の峰幾つ崩れて月の山

しをらしき名や小松吹く萩薄

蛤のふたみに別れ行く秋ぞ

「日光」と「日の光」、「月山」と「月の差す山」、地名の「小松」と植物の「小松」、「二見」と「蓋、身」が掛けられている。『ほそ道』には、収められてはいないが、その旅中詠まれた

めづらしや山をいで羽の初茄子

も「出羽」と「いづ」という動詞が掛けられている。

掛詞は、俳諧にも用いられてきた。ことに芭蕉においては、地名を掛詞として用いていることが多かった。この伝統の上において、虚子も「紫野」を掛詞として使っているのである。

さて、虚子の掛詞観は、どうだったのであろうか。

『俳句読本』（昭和十年日本評論社刊）「俳句史」の「芭蕉以前概観」から引用する。この「俳句史」は、作品本位で、作品をして語らしめるという形で書かれている。

山崎宗鑑かきつばたを折るとて池に臨むを御覧じて

宗鑑がすがたを見ればがきつばた

近衛龍山公

について虚子は次のように鑑賞する。

山崎宗鑑といふ人が大方近衛家に祇候して居つた時の事で御座いませう。庭の池の畔に下り立つて、その池に咲いて居る杜若を折らうとして居るのを龍山公が御覧になつて此句を作られたのであります。宗鑑は法体で頭を丸め墨の衣を纏うて居つたのでありませう。そこで宗鑑の姿を見るとまるで餓鬼だ、餓鬼といふのは乞食坊主とでもいつたやうな意味であらうと思ひます。それを「がきつばた」と云つたのは「かきつばた」と云ふ意味と両方を含ませて居るのであります。

この句の面白味は何処から生じると云へば、かきつばた、がきつばた、此両方を引つ掛けた処にあります。言葉の戯れに過ぎないと云へばそれ迄であります。然もよく思ひをひそめて見ますと、此句の背後には、杜若に対する作者の讚美の情が籠つて居る。此句を読んで後に、何だか笑ひ度いやうな心持が起ると同時に一種の優し味を感じるの、その中に潜んで居る杜若に対する優しい情緒に同情するからであります。只文字の洒落ではあります。花鳥風月の類を翫賞し讚美すると云ふ心持が土台にあつて、其上に滑稽諧諷を専らにしてゐるのであります。今日から見て純粹の花鳥諷詠とは言へないかも知れませんが、然し、広い目からこれを見て云へば矢張り一種の花鳥諷詠でありました。花鳥諷詠のみでは甘んぜず、その傍らに洒落を戦はして喜んで居つたと云ふ傾向があるのであります。

虚子は、寛容である。「言葉の戯れ」ということで否定し去ることもできるところを、良さをなんとか見つけようとしている。そして、「杜若に対する優しい情緒」を読みとつてゐる。

もう一句、おなじような例で

宗祇興行の俳席へ守武出座ありしに何れも法体の人々なれば

お座敷を見ればいづれもかみな月 守武

には次のように鑑賞している。

宗祇といふ連歌師の会の席へ守武が出た時分に詠んだ句であります。守武といふのは神官であります。座敷に出て見ると宗祇始め皆法体の人であつて、坊さんばかりである。皆髪がないといふ事を云つたと同時に丁度その時分が旧暦の十月、即、神無月であつたと云ふことを現はしてゐるのであります。之れも面白味が「かみなづき」の終五字にあるので、頭に髪が無いと云ふこと、神無月といふことの両方を引つ掛けて言つたので、私達が読んで来て神無月に到つて微笑を禁じ得ないやうになるのであります。此句も根柢には矢張り神無月といふものに対する作者の季の感じが土台になつて居て、滑稽は其上に築かれたものになるのであります。

掛詞に対して好意的であると言つてもよからう。他に

おこし置いてねられぬ伽に炭火かな 未得

炭火を起しておく、人を起しておくという掛詞が用いられている句も掲げられている。虚子が、掛詞に対して好意こそ持つても否定的感情は決して持っていないことは明らかだ。

俳諧における掛詞と、虚子の掛詞観について記した。

掲出句に戻る。この掛詞は、恣意的なものではない。先に引用した

我宿の松にひさしき藤花紫野には咲もしぬらん

と同じように、花の色から導かれるように紫野が現れる。この歌は、謡曲「雲林院」の冒頭に

藤咲く松も紫の。く。雲の林を尋ねん。

と引用されている。虚子は、こちらの詞章から、このことばの連なりを知っていたと思われる。

藤から紫が導かれるのは、雅な和歌の世界。それを踏まえつつ、大根の花から紫が導かれるところに俳諧性があった。

この掛詞について、浜中柑児氏は『虚子五百句鑑賞 明治之部』のなかで

大根の花が紫野の紫に対して掛詞となつてゐる。掛詞は古歌などのやうに得意然と用ひられてゐるのは、俳句には厭味ともなるが、此の程度のもものは大して耳ざはりにはならない。それは言葉の省略上掛詞といふことを意識しないかの如くすらく〜と叙し去つてゐるからである。

と述べている。

また、深見けん二氏は「研究座談会（三〇九）」の中で

(前略) 京都の紫野の大徳寺のそばの大根の花を見られて、両方にかゝる言葉として紫といふのをお使いになつてゐるのですけれども、それが如何にも京都の大徳寺のあの雰囲気といふものをよく伝へてゐるために、この紫が両方にかゝるといふことは何の引つ掛りもなく綺麗な美しい言葉として感じられます。

と述べている。ともに、掛詞として用いられているが気にならない旨書かれています。同感である。

調子の良さも類を見ない。「大」が重ねられるところからくるそれは、すぐ気をつくところである。それも上五と下五の始まりが「大」となっている。さらに中七も上五下五冒頭と共通の a 音で始まっていた。ローマ字で表記してみると (da i ko no / ha nu ra sa ki no / da i to ku zi) となる。a i o の母音のくりかえしが、三回重ねられている。また、上五中七の最後もともに「no」であった。

名詞のみできてきていること、「大根の花」で切れる句またがりとなっていること、それらが、軽快な印象を与える。子規の「明治二十九年の俳句界」の中で、従来の俳句との違いを四点述べていたが、その中の「第一 五七五の調を破りたること」の例句となるべき一句である。

\*

「研究座談会(三〇九)」において深見けん二氏は、掲出句について「非常に有名な御句でございます」と述べているが、この句を最初に評価したのは、森鷗外であった。鷗外は、先に引用した明治二十九年二月二十日付鷗外宛虚子書簡の「叱正伏乞」に応え「大根の花」の句を選んでいたのである。この書簡は『續外全集 三十六卷』に見える、明治二十九年三月三日付虚子宛書簡(鷗外全集番号六九)である。以下本文を掲げる。

拝見仕候急グコトニハ無之候又三号ニハ少シニテモ七部集評御起草御送り下サルマジキカ

十五日

トハ申セドモ幸田ナドノガ十七八日ニナルコトシバ、ナレバ其位ニテモヨロシク十五日ニハ評論ナド纏メテ活板ニヤリ跡ハ待チテモ宜ク候大根の花紫の大徳寺俳句ト云フモノハ斯ウモ力ヲ費ヤサズシテ面白キコトヲ言ハル、モノカト驚申候三號ニハ句モ御出被下度正岡君ノ許へ御送りニテ同君等ノヲ併セテ出スヤウニナレバ尤妙ニ御座候  
三日 森 高浜雅兄（傍点小澤）

「急グコトニハ無之候」とは、先の二月二十日付に続く鷗外宛虚子書簡（定本高浜虚子全集番号一九二）に対応する。煩瑣であるが、これも引用しよう。

拜啓仕候 めさまし草巻二面白く通読仕候 愚兄病氣其後手もどり候爾来頑固にて閉口致し居候（中略）

よし梅には負くとも彼岸桜綻ふころには尊扉を叩き得ること、楽みをり候ひしにこの趣にてはいつ上京とも定まらず候 めさまし草巻三待遠く候 拜具

兄の病状が変わらず、上京をさせている青年虚子を安堵させるように「急グコトニハ無之候」と書いているのだ。そして郷里でもできる「七部集」評や俳句の原稿依頼をしている。この依頼の間に、「大根の花」の句評がはさまれているのだ。虚子にとってそれがどんなに嬉しかったことか。

「ホトトギス」昭和九年二月号の「還暦座談会」で語られ、のちに『俳談』（昭和十八年・中央出版協会刊）に収められた「鷗外」という座談に次のようにある。

（前略）鷗外が私の

大根の花紫野大徳寺

といふ句について、俳句といふものは面白いことがいへるものだ、と態々手紙をよこしたことがありました。私の

二十三・四歳の頃のことです。

虚子と鷗外の関わりについては、拙稿、「明治二十七年、二十八年の虚子」（『信州豊南女子短期大学紀要』第5号）においても触れた。

\*

#### 補記1

拙稿「明治二十七年、二十八年の虚子」において、「春雨の衣桁に重し恋衣」について書いたが、明治二十九年二月十七日付虚子宛鷗外書簡（鷗外全集番号六八）に、その句の初出「春雨二十句」についての感想が記されているので補っておきたい。

（前略）春雨二十句めさまし草二巻のため大に光を添へ候事と存申候（後略）

#### 補記2

拙稿「明治二十八年、二十九年の虚子」（信州豊南女子短期大学紀要」第6号）において「海に入りて生れかはらう朧月」について書いたが、明治二十九年二月の鷗外宛虚子書簡（定本高浜虚子全集番号一九二）に付されているので補っておきたい。

海にいつて生れ更らう朧月